

# エンカウンター（ENCOUNTER）

## 第 75 号

平成 20 年 7 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

ウィリアム・バークレー

「希望と信頼に生きる ウィリアム・バークレーの 1 日 1 章」

（柳生直行訳・ヨルダン社）より

（ 2 ）

1 月 28 日 学ぶ者

人の忠告から学ばなければならない。

忠告を求めて他者のもとにおもむく人は多い。しかし、彼らは、ほんとうは、忠告など求めてはいないのだ。「きみの生き方は立派だよ。いまのままやっていけばよい」と人にいつてもらいたいだけのことなのである。忠告を求めることと、よろこんで忠告にきき従うこととは、全く別のことである。

実例から学ばなければならない。

（悪いお手本のうわさを聞いた場合）私たちはそれを警告として受け取らないで、「おれはあんなふうにはならないさ」といって、前と同じ生き方をつづけようとする。災難はこういう態度から生れる。

自分のあやまちから学ばなければならない。

賢者とは同じあやまちを二度とくり返さない人間をいう。ところが不幸にしてわれわれ大多数のものは、同じ誤りを何度となくくり返す。われわれがいつこうに進歩しないのはそのためである！

## 1月29日 バランスを欠く

われわれがいろんなことでバランスを欠いているということは、人生の悲劇である。

### 時間と努力の配分にバランスを欠くことがある。

競馬新聞を隅から隅まで読んで、さてどの馬に賭けようかと、じっくり考えている人を見たことがあるだろう。そんな人に限って読書なんかには時間を割くのはもったいないと考えるのである。

仕事に当てる時間よりも、娯楽やスポーツに使う時間のほうがはるかに多い、という人がある。2台目の車、カラーテレビ、ぜいたくなレジャーといった「財産」を手に入れるためには、節度も遠慮もあつたものではない。ところが、ほんとうに大切なこととなると、それに当てる時間が全くない、という始末である。社会事業家や牧師の中には他人の家族のためには十分に時間を使いながら、自分の家族のこととなると何もしない、という人が多い。

かりに祈るべきことが一つしかないとしたら、われわれはつぎのように祈るべきであろう、「神よ、大事なことと、そうでないこととの違いを見る眼を与えてください」と。

### 興味や関心の配分にバランスを欠くことがある。・・・

大事なことからまず手をつけることが必要である。

バランスの感覚を養い働かせることが何よりも肝要である。

1月30日 誇りをもて！

世界が必要とし、また神が必要としておられるのは、なにか特別なことをやれる人間ではなくて、あたりまえのことを特別上手にやれる人間である、といった人がいる。親切なバスの車掌さんに切符を切ってもらおうと、一日中気分がいいということがある。優しい店員さんに接すると、なんだか世のなかが前よりよくなったような気がしてくる。

いつも公衆の眼に映るような立場にある人たちは、ある人の助けなしには一日たりとも仕事をつづけることができない。その助け手は、人びとの眼に見えないところで、神が人間に与えたもうた最大の仕事、つまり真の家庭をつくるという仕事、をやっている。妻がそれである。これは平凡といえれば平凡だが、しかしれっきとした事実である。

われわれは他人の才能を羨んではならない。人はみなそれぞれに才能を持っている。問題はいかにそれを働かせるかということである。世間の人の眼に映る才能であろうと、ひと知れず花を咲かせる才能であろうと、それは問題のないことである。

イエスは時折り、御自分の生涯について、断片的に語っておられる。次のたとえ話もその一つである。ある立派な家の主人が召使にこういったという。「おまえはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理するようにさせてやろう」(マタイ 25・21,23)

与えられた仕事に誇りをもつことである！

## 1月31日 感染

20世紀半ばのもっとも奇妙な現象の一つは、おびただしい広告の氾濫である。…

現代生活の、これまたひどい特徴は、印刷機からはき出される破廉恥な文学の洪水である。どこの町へ行っても、ポルノすれすれの、いやはっきりポルノといえる本を扱っている本屋を探すのは、いとも簡単である。こういう本は、人間の悪い性質をことさらに刺激しようとするものである。…

世は感染にみちている。現代生活にあっては、若者がそのような感染から免れることはまず不可能である。

こういう危険な時代には、親の責任は特に重いといわなければならない。

学問教育だけでなく人生教育をほどこす責任がある。

若者が人生に破滅して親や教師のもとに帰ってきて、「あなたが、教えるべきことをちゃんと教えていてくれたら、ぼくはこんなことにはならなかったろう」という、これほど悲しい悲劇はない。

とりわけイエス・キリストを人生の生きた伴侶とせしめる責任がある。

私たちは若者達をイエス・キリストに紹介し、彼の臨在を意識しつつ彼とともに人生の道を歩むよう、教えかつ訓練することが出来たならば、彼らは彼らを襲うすべての悪しき感染に対してきわめて有効な予防薬をもっていることになるだろう。

世の中が文明化し、悪ずれしてくればくるほど、ますますイエス・キリストが必要になってくるのである。

## 2月3日 指導者(2)

多くの人は急ぎすぎて仕事を仕損じる。何もかもいっぺんに変革しようとするのは危険である。人々の信頼や好感をかちとる前に、大変革を試みてもうまく行くはずがない。

多くの人は待ちすぎて仕事を仕損ずる。行動しようとしたときにはもう変革の時期は過ぎ去ってしまっている。いつ行動すべきかを知る才能　これ以上に大きな才能はない。

指導者は危険をおかす勇気を持たなければならない。

人々がソクラテスを殺したのは、彼があぶのようにうるさい奴だったからである。指導者は危険を覚悟していなければならない。

「深みに乗りいませ」というのが神の命令である(ルカ5・4)。深みはけっして安全な場所はない。人間に自由を与えるほど危険なことはない。だが神はあえてその危険をおかしたもうたのである。

指導者は自分に従う人たちを熱中させるほどの魅力をもっていなければならない。

その魅力のよってきたところの一つ、自己の理念の正しさに対する燃えるがごとき信念と、一点のかげりもない誠実な意図がそれである。自分自身が燃えていなければ、人の熱意をかきたてることは出来ない。自分自身の骨に火がついていなければ、人の心に火をつけることは出来ない。その誠実さが信じられないような指導者には、だれもついていかないだろう。日和見主義者や野心家はすぐに見すかされてしまう、が熱意に燃える人は、たとえ間違っていると思われても、なお人々の尊敬をあつめるであろう。

指導力が多くの代価をともなうものであることは、見やすい道理である。それはまずキリストにおのれを献げるところから始められなければならない。というのは、真の指導力は自己高揚にではなく、自己抹殺に根ざしたものである。

## 2月9日 人生のおきて

人生においては冒険的実験と経験尊重との間に正しいバランスがなければならない。

交通道德は単なる勧告ではない。道路の混乱を避けるためには、どうしても守らなければならないものである。同様に、人生を道なきジャングルにしたくなかったら、キリスト教の倫理法則はどうしても守らなければならないのである。…

キリスト教倫理は、クリスチャンの自由を制限し限定するためにでっち上げられた規則や規定ではない。それは、おのこの場合に、ひとりひとりが自分で考え自分自身に適用すべき諸原理を提示したものであって、それらの大前提になっているのは、クリスチャンはイエス・キリストと同じように生きかつ愛さねばならぬ、ということである。

正常な運転者なら交通道德を無視しない。キリスト教的生活規範についても同様のことがいえる。…

社会がこのような人生のおきてを破るなら、みずから破滅を招くことになる、ということを教会は堂々と公言すべきである。

2月10日 土台

わたしは田舎の村に住むある夫婦を知っている。

夫が急病にかかり、重態におちいって、診療所にはこばれた。妻は毎日見舞いに行き、わたしたちも、ご主人はいかがですかとしょっちゅう聞いていた。

ある晩その奥さんがわたしにいった。「主人がきょうなんて言ったかごぞんじですか。」「さあ。」「なにかもってきてほしいものはありませんか、とききましたら、『村の通りにある井戸から汲んだ水が飲みたい。それだけだ』というのです。…」

人がほんとうに窮地に陥ったとき求めるものは、村の井戸の水と  
いった単純なものである。

宗教についても同じである。

大学で教えるのがわたしの仕事である。学問がどんなに大切なものか、わたしはよく知っている。が、わたしはときどき、宗教というのはほんとうにそれほど難解・複雑なものか、われわれの「専門的な」学問のうちいったいどれだけがほんとうに人間的状況にかかわっているのか、といぶからざるをえないのである。

ほんとうに窮地に陥ったときわれわれが考えるのは子供時代のこと  
とである。

トマス・カーライルは故郷の小村、南スコットランドのエクレフェチャンから遠く離れていったが、彼はいつもこういていた。自分を正しい道にふみとどまらせたのは、「神に信頼して正しいことを行いなさい」という、こどもの時きかされた母の声だった、と。…」

子供時代の信仰をふり返ることのできる人は幸いである。どんな人生もその土台以上には強くないからである。

単純なこと、つまり土台 苦しいときにものをいうのがこれである。

## 2月11日 名もなき人間

最近わたしはある一人の婦人の話を聞いた。彼女は、ものしずかな、柔和な、目だたない人だった。

ある日彼女はこういった。「わたしは、おえらい方を見るたびに、自分が名もなき人間であることを、ほんとうにありがたいと思うのです」。

彼女は何をいおうとしたのだろうか。私の推察を述べてみよう。

彼女はたぶん成功によって甘やかされた人々のことを考えていたのだろう。…

あなたが自分の職務を称賛するのはよい　しかし自分自身を賞賛するのは正しくない。出世街道を一步前進したら、こう自問すべきである。「わたしはこの昇進を権力行使の手段と考えるか、それとも奉仕の手段と考えるか。利益獲得の手段と見るか、それとも人に与えるための手段と見るか」。

クリスチャンは同胞の間であって人々に仕えるものであることを忘れなければ、成功によって甘やかされるようなことはないだろう。

商売でも他の職業でも、地位が高くなったらいっそう働かなければならない。…

地位の高い人よりも下積みの人間のほうが気は楽である。しかし、神から与えられた才能に応じて社会に貢献しなければならない、とはっきり自覚していさえすれば、社会の要求に対して不平をこぼすこともないだろう。

キリスト教的人間観を受入れるとき、この世には名もなきつまらぬ人間などひとりもないことがわかる。…

われわれはすべてを失っても、なお神をもっている。神をもっているなら、つまらない人間ではあり得ない。



## 2月12日 ことば

わたしたちは、外国語の習得はできないにしても、人びとを助けようと思うなら、あるいくつかのことばが話せなければならない。

疑いのことばが話せなければならない。…

一度も試練を受けたことのない信仰は、最高の信仰とはいえない。疑いを持っていることを恥じてはならない。疑いは不動の信仰への一里塚である。形式的な真情を鵜呑(うのみ)にする人よりも誠実に疑う人のほうがより信仰的である場合が多い、といったテニソンのことばは正しい。

誘惑のことばが話せなければならない。

ほんとうの善に至る道は、誘惑との戦いに勝つことのうちにある。イエスが非常に偉大であるのは、一つには、彼が誘惑(こころみ)られたからである。それによって彼は、誘惑を受けている人びとをあわれみ、また助ける力を与えられたのである。

悲しみのことばが話せなければならない。

バリーは、彼の母が愛する息子を失ったときのことを語っている。「そのときから母の眼は柔和になりました。よその母親たちが子どもを失うとわたしの母のところにかけてつけるようになったのも、そのためです。」

人びとを慰める力は高い代価を支払わずには得られない。それはみずから悲しむことによるのみ得られるものなのである。

疑うものを助けるには、自分も疑った経験がなければならない。誘惑されているものを助けるには、自分も誘惑された経験がなければならない。悲しむものを助けるには、自分も悲しんだ経験がなければならない。エゼキエルは言った、「彼らの坐っているところにわたしも坐った」と(エゼキエル3・15)。

これが人びとを助ける道である。

## 2月14日 拡大鏡

心の中に拡大鏡があって、これは老人だけでなく若い者ももっている。

### 自分の仕事の量を拡大して見る人がいる。

そういう人に会くと、この人は全世界を一人でしょってるんじゃないかという感じがする。こんなに働かなければならない人は、開闢（かいびやく）以来はじめてではないか、という気がしてくる。

だが、自分の仕事がいかに大変であるかを人に話すのは、あまり賢明なことではない。なぜなら、そんなに仕事があるんだったら、むだ話なぞやめて、さっさと仕事にとりかかるべきだからである。

### 生活のつらさを拡大して見る人がいる。

そういう人は、年がら年中けんか腰である。「なぜおれはこんなひどい目に会わなければならないのだ。いったいおれがなにをやったというのだ」これがその関（とき）の声である。

そういう人に向かってパウロはいう、「君の身に起こったことは、すでに多くの人びとの経験したことだし、これからも多くの人々の上にふりかかるだろう。そういうことは人生の一部にすぎないのだ。だが神様はちゃんとのがれる道を備えて下さるから、心配はいらない」と（コリント第1,10・13）。

前にお話したバランスの感覚を失わないようにしなさい。自分の仕事をほんとうに愛し、それが大切な仕事だということをほんとうに知っているなら、つらくてたまらないということはないはずである。

## 2月17日 聖書(2)

あなたが聖書からなにを引出すかは、あなたが聖書になにをもっていくかによって決まる(と前に言った)。

聖書は人生のかくも多方面に触れているので、その中に自分の人生や仕事とのかかわりのあることを全然見出せないという人は、ひとりもいないはずだ(とこれも前に言った)。

聖書はわれわれの必要  それがなんであれ  に答えてくれる。

聖書は、悲しみのときに慰めを、苦難のときに導きを、地位を失ったときに勇気を、欣(よろこ)びを求めるときに賛美の方法を、与えてくれる。

聖書のうちに、われわれの必要に答えてくれることばを見出しえないような、人生の領域は一つもない。

これがこの本のふしぎなところである。

聖書はこれに親しめば親しむほど多くのことを与えてくれる。

聖書は、もっとも無学な、この上なく単純なひとにも、救いのことばを与えてくる。が、深く掘り下げていくと、どんな知者もてこずる深遠な意味と内容を含んでいる。それは単純な礼拝の方法を示すとともに、知識  考古学、歴史、地理学、生物学等  の一大宝庫を提供している。

ペルシャ人は、子どもたちが汗を流してからでなければ食事を与えなかったという。聖書に対して思索と努力を投入すればするほど、いっそう多くの富が与えられるのである。

信仰をもって求める人はかならず聖書のうちに、自己を見出した答を見出すのである。